

本気の人間に出会い、 ぶつかり合うことで、熱くなる

横浜国立大学 横浜都市文化ラボ

「人間は、日常では出合わない怪物的なものに出合ったとき、真の力を発揮するのです」と、横浜国立大学教育人間科学部教授・室井尚氏は語る。室井氏は大学で美学や哲学を教える一方、横浜都市文化ラボを主宰し、大学内では体験できない非日常的な出会いを教育に組み込むことで、学生の力を引き出そうとしている。

室井氏が学生の持つ潜在的な力に気付いたのは、劇作家の唐十郎氏を横浜国立大学の教員として招聘し、唐ゼミを開始した2000年頃からだ。前衛演劇の旗手といわれた唐氏は、野外テント公演という独自のスタイルをそのまま大学に持ちこみ、学生主体の演劇づくりを指導した。「学生は、唐さんの圧倒的な存在感が怖いんです。それでも逃げない。台風が来れば、バイトもサークルも放り出して、テントを守りに来ました」（室井氏）

2001年の横浜トリエンナーレで、室井氏が美術家の椿昇氏と共同制作した巨大バッタのバルーンが破れたときも、窮地を救ったのは学生だった。全長60メートル、重さ1トン以上ある巨大なバッタを、ホテル7階の広場に設置した高さ8メートルはある足場に登って降ろし、修復したのだ。「その底力を目の当たりにして、自分は学生の何を見てきたのかと愕然としました。それからです。学生の潜在的な力を引き出してやろうと思ったのは」（室井氏）。室井氏は、唐ゼミや巨大バッタ展示のような、

横浜都市文化ラボ

文部科学省の平成21年度「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」に採択された、7大学連携による北仲スクール*の後継事業で、横浜国立大学の自己資金により2012年に開設。「教室を持たない芸術文化スクール」として、国内外で活躍するアーティスト、ミュージシャン、評論家、研究者、俳優などを横浜のアートスペースや文化会館に招き、授業を提供する。教育人間科学部マルチメディア文化課程、国際共生社会課程、人間文化課程所属の学生は、履修登録をし「可」以上の評価を得た場合、卒業単位に算入できる。

学内では得られない出会いや経験をさせようと、いろいろな人が行き交う街中での授業を試みた。

2009年に文部科学省の助成で北仲スクールを開設して以降は、正式な授業として大きなイベントの企画運営にも取り組んだ。椿氏の展覧会を川崎市の旧体育館で開催した際には、アートの力で社会を変革しようとする作家のエネルギーをどう伝えるかに、学生たちは注力した。結果、その見せ方に高い評価が集まった。そして、助成が終了した2012年からは、横浜都市文化ラボとして活動を継続する。初年度は講座や演劇ワークショップのほか、映画監督の望月六郎氏を招き、映画を製作し上映会を運営する映画塾も開講した。「映画塾では、学生がシナリオを書くところから始めるのですが、シナリオを書くというのは、自分をさらけ出す作業なんです。その結果出てきたものを、監督は容赦なく否定する。すると、学生がボロボロ泣いたり、ものを投げて怒ったりするんです。そうした、学生が初めてむき出しの自分を出す瞬間を見ると、うれしくなりますね」（室井氏）

現状に冷めていると評される若者たち。だが、非日常的な状況のなかで、楽しみながらも本気で仕事に向き合う大人に出会い、衝突して追いつめられたとき、若者も本気を出して熱くなる。企業には、そんな機会は用意されているのか。あらためて問い直したい。



室井 尚氏

教育人間科学部 / 都市イノベーション研究院
教授

*北仲スクール

横浜国立大学、横浜市立大学、東京藝術大学、神奈川大学、関東学院大学、東海大学、京都精華大学の7大学連携による教育事業。未来の都市文化創成・都市デザインの担い手となる人材の継続的育成を目指し、横浜の歴史的建造物「北仲ブリック」に設立した。正式名称は「横浜文化創造都市スクール」。

学生の本気を引き出す教育

あつし
中野敦之氏

「劇団唐ゼミ☆」代表兼演出家
横浜国立大学教職員



ヨコハマ グランド インターコンチネンタルホテルに設置された巨大バッタ。当時大学3年生で巨大バッタの設置や修復作業の中心となった中野敦之氏は、第1回横浜トリエンナーレ終了後に、「社会に出ていくなんで、つまらないと思っていました。でもこんなに遊び心のある大人たちがいるとわかって、ちょっと不安が消えました」と語っている。



椿昇展「GOLD/WHITE/BLACK Complex」。2010年、一般の人が普段訪れることのない川崎市の旧体育館で開催。「平和構築」や「生と死」といった社会問題をテーマに、実物大のロシア製核ミサイルのバルーンをはじめ、世界各地の鉱山跡地の写真などを展示した。口コミで評判が広まり、最終日近くには毎日200人以上の観客が訪れた。



みわこ
櫻井文和子さん
教育人間科学部
人間文化課程1年

2012年度のプログラムの1つだった演劇ワークショップの再演を手伝いました。先輩方が意見を出し合って演劇をつくっていくのを見て、自分の考えを表現することの重要性を感じました。また、初めて観た野外演劇は、衝撃的でした。こんな演出方法もあるのかと。言葉だけでなく、身体や空間などすべてを使って「表現する」ことを、これから学んでいきたいと思っています。

2001年 第1回横浜トリエンナーレ

●取り組み

室井氏が美術家椿昇氏と組んで出展した巨大バッタ設置作業に、学生も助っ人として参加。室井氏の授業を「今日は現地集合」としたり、ボランティアを募った結果、準備期間から開催期間を含め、のべ200人の学生が集まった。

●学生の動き

突風で巨大バッタのバルーンが破れたときは、多くの大人たちはあきらめかけた。だが、学生たちは、浜風にあおられ、破れた布やロープが顔にあたるなか、命の危険も顧みずバッタの救済にあたった。

2009年秋 「北仲スクール」開設

●取り組み

横浜の都市文化を再生させようという室井氏の挑戦に、多くの学生が参加。たとえば、2010年の「シーバス活性化プロジェクト」は、横浜港の高速遊覧船シーバスの魅力を横浜市民に伝えようという企画。学生ならではのアイデアで、斬新なデザインのパンフレットと、たい焼きならぬ「シーバス焼き」を誕生させた。

●学生の動き

「シーバス焼き」の型は、学生が深夜バスで富山県に向かい、型づくり名人に依頼して作成した。また、食品衛生責任者資格取得のため講習会に通った学生もいた。

2012年9月 「横浜都市文化ラボ」開設

●取り組み

「北仲スクール」閉校に伴い、横浜国立大学が「横浜都市文化ラボ」として事業を継続。初年度の望月六郎氏の映画塾では、学生たちの投票でシナリオを3本選び、映画を製作し、一般の映画館で上映した。

●学生の動き

シナリオが選ばれ監督を担当することになった学生は、選んでくれた仲間の手前、逃げられない。仕方なく取り組み始めた学生も、望月監督に「上映できる代物ではない」と言われると奮起し、室井氏の具体的なアドバイスにも「美意識に反する」とこだわりの見えるようになる。



唐ゼミの卒業生であり、室井氏の「教室を飛び出して街中で学ぶ」取り組みを体験した。

入学当初は、室井先生も唐さんも、ただいだけで怖い存在でした。とはいえ、展覧会や公演などの開催日が近づき、追いつめられると、自分をさらけ出して向き合わざるを得ないんです。逃げることもできますが、単位に関係なくこのラボに参加する学生は、そうはしない。それは、やはり、室井先生や唐さんのような“怪物”に認められたいからです。認められようと、本気になる。先生たちはそこにつけてきて仕事を振ってきますが、大学の外の優秀な人と関わる機会も多く、大いに刺激を受けます。



前期授業「台東区パノラマプロジェクト1」。2014年1月に、台東区の旧小学校校舎を利用し、演劇、映画、音楽演奏などを行う複合アートイベント「台東区パノラマプロジェクト」を開催予定。それに向けて、準備を進める。学生たちはそれぞれの得意分野を生かし、広報や、WEB制作などの役割を担う。



中川慎太郎さん
理工学部
数物・電子情報系学科1年

理工学部なので単位にはならないのですが、芝居に興味があって受講しています。「台東区パノラマプロジェクト1」では、地域の住民の協力を得るために、入谷の朝顔市に行きました。焼き鳥屋さんから町会長を紹介してもらい、了解をもらう。こうしたイベント開催準備の手順やアートマネジメントについて実践的に学ぶことができるのは、貴重な機会だと思っています。